

「助け合いながら地域でくらす」 事例報告と講演会

I はじめに ～10周年記念事業開催に当たって～

NPO 法人コミュニティルネッサンス研究所は「高齢者が自立した生活を続けるために必要なものは何か」を考えることを目的として、2009年6月に設立総会を開き三浦章良代表理事を選出しました。三浦代表を中心に同年10月29日には法人登記を完了しました。さらに2012年度からは安川悦子代表理事を中心に活動を続け、今年で10年目を迎えました。

この10年間に、設立当初の理念に基づいて様々な事業を行ってきました。なかでも高齢者施設利用者の方々と講座、花の水やり・ヤギの餌やりなど仕事づくりを行ってこる中で、見えてきたものがありました。すなわち高齢者の自立した生活には、「高齢者のための国連原則」に述べられているように、『教育などに参加し社会と繋がり、社会の中で役割を持つことが大切』であることが分かってきました。そしてこれからの課題は、どうすれば高齢者自身が社会につながりながら生きていくことが出来るか、ではないかと思えます。

そこで、10周年を記念して「助け合いながら地域でくらす」というテーマで事例報告と講演会を開催することにしました。

II 事例報告

1. 坂本講師からのコメント

- ① 試行錯誤しながら自分で考え、持続されていること。
- ② 理念や使命をじっくり考えられていること。
- ③ みんなで地域のことを考え、できることから行動に移していること。
- ④ コミュニケーションを大事にし、その中で助け合っている。
- ⑤ 助けることで元気をもらっている。

それぞれの事例報告から学ぶべき点のコメントを上記のようにいただきました。これはこの事例報告のあとの講演の中でも「助け合いながら暮らすための地域づくり」を行う上で大切なことであることが述べられました。

2. それぞれ特徴のある事例報告

福山市の高齢化率は26.56%。事例報告地域の御幸町は25.1%、駅家町の服部地区は35.5%、山野町は51.2%でした。(なお、御幸町の高齢化率は2018年度、他は2015年度のデータ)

このように事例報告をされた3地域にはそれぞれ特徴があり、それぞれの地域が抱える課題をどうするかを考え、実行されてきたものでした。

御幸町は福山市のほぼ中央部に位置し、最近開発が進んでいる地域です。この地域は過疎地域に比べると商店や医療機関もある暮らしやすい地域です。こうした地域であっても、高齢化などにより個人のレベルで助けが必要な人に対して、地域がどのように対応したら良いかを考えて実行されている事例でした。

最後に藤井さんがボランティア活動を行っての感想、「ボランティア活動は、依頼者が困っていることをしてあげるだけではなく、ボランティアも依頼者から元気をもらっている」と読み上げられたのが感動的でした。

それに対して山野町は過疎化がすすみ、生きていくためのインフラすらなくなりつつあり、個人のレベルでの対応では到底追いつかない状態を地域で考えようとした取り組みでした。3地域の中でも課題が多く大変なところですが、「つながりの過疎」が生じている都会の人にはうらやましい取り組みであったと思います。

一方、服部の取り組みは地域で対応した事例ではありませんでした。しかしこの例は、あちこちで起きている農地を耕作放棄地にしないためにどうするか。そして、どうしたら農業をビジネスとして成り立たせることが出来るかを考えられた事例でした。「くらしといのちを輝かせる」という理念や「いのちのもと食。日本を農業で開墾する」という使命には、地域への拡がり考えた報告でもありました。

いずれの事例も、地域作りとはそれぞれかかえている課題をどうしたいのかを自分たちの頭で考え歩み出すことが大切だと教えていただいた報告でした。ありがとうございました。

Ⅲ 講演 『助け合いながら地域でくらすために』

1. 昨今の「地域作り」への反省（自省を込めて）

1) 経済至上主義への動員になっていなかったか

現在の地域作りの評価は、①どのくらい経済波及効果があったか、②特産品での収入や雇用、人口は増加したか、③福祉や医療費の削減など行財政の効率化が図られたか、という“ものさし”で行われています。

2) “生存条件”としての「地域づくり」になっていなかったか

人口減少社会になるので、頑張らない地域は生き残れない、とあおられています。地域間競争があおられ、いかに地域の暮らしが継続できているかではなく、うまくいっている間だけマスコミが取り上げるなど、モデルケースとして地域作りが消費されているといえるでしょう。

2. 助け合いながら地域でくらす

1) 存続が保障される社会とは

近年人口減少により地域が消える、とあおられています。しかし、人が当たり前にいける社会・地域が当たり前であり続けられる社会を私たちは目指したい。

2) 「共生」の論理に基づく「自治」の結い直し

もともとの自治、すなわちこれまでの集落・地区などの地域社会は、水平的な関係をベースに構成される対等・平等な社会でした。すなわち「共生」を重視した社会です。そして個人や家族が大事にされる社会のシステムであり、その行動原則は「おたがいさま」でした。

それに対して、国や現在の地方自治体が行おうとしている「自治」は、垂直的な関係をベースに構成される、トップダウンを重視した社会です。すなわちそれは社会効率的なあり方を考えて、それを前提としてその中に個人が位置づけられるやりかた、「切り捨て論」「集約撤退論」の論理です。

私たちが地域の自治を結い直そうとしているのは、前者のような「自治」を考えています。

3) 「つながり」の力で支えていく

「過疎」という言葉がよく使われますが、一番怖いのは「つながりの過疎」です。都会ほどではありませんが、農村部でも「つながりの過疎」が進行しているように思えます。

人口が減少している地域への支援を行うのが「過疎法」（過疎地域自立促進特別措置法）で、2020年までの時限立法です。日本全体が人口減になっている現在、見直しがおこなわれています。

行き過ぎた「機能分化」「役割分担」からの脱却が必要です。たとえば、これまで学校は地域の広がりの中で捉えられていましたが、現在は教育に特化しています。子どもの数が少ないと教育効果が上がらないから、と言ってさかんに学校の統廃合が行われています。しかし、宮崎県のある地域では小規模校がネットワーク化して、その課題を乗り越えているところもある。

できることからちょっと手出しをすることで地域を支えることが出来ます。例えば、民営化前の鳥取県智頭町の郵便局では郵便配達をついでに高齢者の安否確認を行っていたような例のように。

4) 「助ける」ではなく「助け合い」

「誰かのためで」ではなく「自分たちのため」と考える事が大切です。「助ける」から「助け合い」へ考え方を変えましょう。「やってあげよう」「してあげよう」は長続きしませんし、「助け合い」にはコミュニケーションがあります。これが大切なのです。

3. では、なにをするのか

1) 「テリトリー（縄張り）」としての地域

囲う・守る対象としての地域、すなわち安心して生きる場、と考えられるような地域作りが大切です。例えば広島県安芸高田市の川根地区では田んぼの区画整理のやり方が良い例です。どこから始めようかと考え、皆の意見で一番奥の集落から始めようとなった。端が守られていると全体が守られているという気持ちが強くなります。面を支えるには端から行うことが大切なのです。

2) 「たまり場」づくり

駄菓子や、縁側、酒屋などがだんだんと失われていきました。これらは地域の「たまり場」の役割を果たしていました。再生が大切。

3) 「学習活動」と「実践」

地域の歴史は①従来の制度→②従来の制度を覆す課題が発生→③課題の把握と共有→④課題に対応するための行動→⑤新たな制度の確立をくりかえしてきました。

①の従来の制度に凝り固まっていると次に進めなくなり、地域や社会が脆弱化しますし、従来の制度に安住していると何か起こったときに経験知不足で大変なことになるのです。

「学習活動 (②→③)」と「実践 (③→④)」の繰り返しにより経験知を養うことができ、状況への対応力が高まり地域が強靱になります。ですから、日頃から学習活動や実践を繰り返すことがとても大切なのです。

4) 住民それぞれの存在が認められる場作りとしての地域づくり

こうした地域づくりをするためには、まず人を「属性」(性別・肩書き・家柄…) で判断せず、互いの個性や特性を認め合い、活かし合う事が大切です。

いいかえると「地域づくり」とは、住民それぞれの存在が認められる場づくりを通じた、住民の地域に対する「誇り」と「愛着」を再生することもあります。

誇り→地域の中で自分の存在が認められる

愛着→自分の存在を認めてくれる地域に対して持つ

誇りと愛着を感じる地域からは人は簡単には出ていかないし、戻ってくる。これが究極の人口減対策であると私は考えています。

(文責 加納)